令和６（２０２４）年度

上海スタディツアー

報告・感想集

「你好！」（浙江極客橋智能装備股份有限公司（ＧＢＩ）にて）

公益財団法人茨城県国際交流協会

はじめに

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響による中止期間を経て、約６年ぶりに、令和７年３月４日から８日までの５日間、地域を担うグローバル人材の育成や海外青年との友好交流活動の推進を目的としたツアーを中国・上海市で実施しました。

当事業は、（公財）茨城県国際交流協会が企画し、茨城県上海事務所のサポートを得て、県内の学生が在外公館や企業等の訪問、文化施設見学、現地大学生との交流などを行うもので、今年度は大学生２２名が参加しました。

ツアーのふりかえりを兼ねて、参加者の新鮮な思いを綴った報告・感想集をとりまとめました。視察研修先での学び、交流での体験、及び全体を振り返る参加者ごとの感想を記しています。日本でメディア・SNS 等から得ていた知識と、実際に肌で感じた現地とのギャップに、驚きや発見をもって帰国した方が少なくありません。

参加した学生の皆さまが自ら人生を切り拓いていく際に、この体験をよりどころとして、グローバルな視野を持って活躍してくれることに期待しています。

参加者の在籍大学である茨城大学、茨城キリスト教大学、筑波大学、駒澤大学、また上海でお世話になった皆さま、ありがとうございました。

公益財団法人茨城県国際交流協会

南京東路界隈の賑わい

旅　程

日程	内容
３月４日（火）	茨城空港から空路、上海に向け出発 ・茨城県上海事務所員、常陽銀行上海駐在員との夕食懇談会 ・外灘地区にて夜景視察
３月５日（水）	・常陽銀行上海駐在員事務所（講義、質疑応答） ・JETRO 上海事務所訪問（講義、質疑応答） ・在上海日本国総領事館訪問（講義、質疑応答） ・アポロパーク訪問（施設見学、試乗体験）
３月６日（木）	・魯迅故里、魯迅記念館視察（施設及び展示見学） ・倉橋直街、八字橋視察（自由行動） ・浙江極客橋智能装備股份有限公司（GBI）訪問（施設見学、講義、夕食会、ドローンショー鑑賞）
３月７日（金）	・華東師範大学訪問（講義、現地学生との交流） ・華東師範大学の中国人学生との市内視察（グループ行動で南京東路ほか散策） ・華東師範大学生との夕食交流会
３月８日（土）	上海浦東国際空港から空路、茨城に帰着

旅行業者：東武トップツアーズ株式会社水戸支店

宿泊ホテル：上海揚子江綺麗笙酒店（Radisson Collection Hotel, Yangtze Shanghai）

航空会社：春秋航空

参加学生　２２名（５０音順）

氏名	所属	報告	頁
青木　美咲	茨城大学	学生交流	1
伊藤　柊人	茨城大学	懇談夕食会	2
呉 ウンビ	筑波大学	総領事館	3
大月　香乃	茨城大学	常陽銀行	5
大友　麻有里	茨城大学	外灘地区	6
大貫　達也	茨城大学	ＪＥＴＲＯ上海	7
加瀬　史歩	筑波大学	倉橋直街、八字橋	8
菊地　清華	茨城大学	アポロパーク	10
澤木　明	筑波大学	ＧＢＩ	11
清水　星夜	茨城大学	アポロパーク	12
瑞慶覧　長秀	茨城大学	華東師範大学	13

氏名	所属	報告	頁
田中　若葉	筑波大学	ＧＢＩ	15
為我井　侑未	駒澤大学	学生交流	16
照沼　朋香	茨城ｷﾘｽﾄ教大学	常陽銀行	17
中川　侍音	茨城大学	総領事館	18
蜂須賀　華	茨城大学	華東師範大学	20
花木　枝里奈	筑波大学	懇談夕食会	21
羽村　亜海	筑波大学	魯迅故里	22
廣瀬　弥玲	茨城大学	外灘地区	23
村越　萌佳	茨城大学	魯迅故里	25
山田　侑奈	茨城大学	倉橋直街、八字橋	26
米山　鈴薫	茨城大学	ＪＥＴＲＯ上海	27

報告・感想

青木　美咲

報告（現地大学生との市内視察と夕食会）

上海スタディツアー4 日目の 3 月 7 日（金）、私たちは現地の大学生とともに南京東路の市内視察を行った。南京東路は上海を代表する繁華街であり、全長約 5.5km にわたる歩行者天国が特徴的なエリアである。歴史ある百貨店や最新のショッピングモールが立ち並び、昼夜を問わず多くの人々で賑わっている。この視察では、現地大学生が案内役となり、街の歴史や発展の過程について説明を受けながら散策を行った。

視察の途中、私たちは南京東路にある「CHAGEE」という人気のティースタンドに立ち寄り、班のメンバー全員でピーチウーロンティーを注文した。この店舗では現金は使用できず、支払いはすべて電子決済のみで行われていた。日本ではまだ現金決済が主流の場面も多いが、上海では電子決済が完全に普及していることを実感し、キャッシュレス化の進展に驚かされた。実際、街を歩いていると、QR コード決済を利用する人の姿が非常に多く、特に若い世代だけでなく高齢者の利用も見受けられた。このような社会の変化を目の当たりにし、日本との違いについて考えさせられる機会となった。

今回の視察では、単なる観光ではなく、現地の学生との交流を通じて、上海の文化や生活スタイルをより深く理解することができた。また、都市の発展や技術革新を肌で感じる貴重な体験となった。短い時間ではあったが、異文化理解の重要性を改めて認識し、今後も積極的に海外の社会や技術について学んでいきたいと感じた。

感想

今回の上海スタディツアーに参加し、現地の大学生との交流や市内視察を通じて、多くの学びを得ることができた。特に、南京東路での視察では、歴史ある街並みと最新の商業施設が融合する上海の発展の様子を実際に目の当たりにし、都市のダイナミックな変化を実感した。また、電子決済の普及度の高さには驚かされ、日本との技術面での違いを肌で感じる機会となった。

現地の大学生との交流を通じて、言語や文化の違いを超えて理解し合うことの大切さを改めて認識した。会話の中では、学業やキャリアに対する考え方に違いがある一方で、共通の関心事も多く、互いの文化を尊重しながら意見を交わすことができた。この経験は、異文化理解の重要性を学ぶ貴重な機会となった。

今回のツアーで得た経験を今後の学びに活かし、さらに視野を広げていきたい。今後も積極的に国際交流の機会を持ち、日本と海外の文化や社会の違いについて深く考え、学び続けていくことを目標としたい。

伊藤　柊人

報告（茨城県上海事務所員等との懇談夕食会）

上海に到着した初日の夕食では、茨城県上海事務所職員の方および常陽銀行上海駐在員の方２名と懇談しながらいただきました。「大富貴」というレストランにて、回転テーブルでコース料理を頂きました。店内はいたるところにある福の字の飾りが目につき、また竹の室内庭園も印象的でした。

私のテーブルでは先ず始めに、学生の自己紹介と専攻、進路についてお話ししました。今回のツアーは学年や大学が異なる学生が集まっており、海外渡航経験も多様であるため、各人がそれぞれ持っている参加動機や所感を共有しました。駐在員の王さんは茨城大学の OG であったため、学生生活についても話題にのぼりました。その後、常陽銀行上海駐在の仕事内容についての話題に移りました。駐在員としての業務は調査広報や相談支援にとどまり、直接的な商業活動は制限されますが、上海から茨城に進出したいという企業をサポートすることは、大変意義深いものであることが伝わりました。とりわけ、駐在員の中村さんが、企業支援に携わることはその企業のためのみならず茨城県全体の利益に貢献できるという熱い想いを語ってくださいました。また、学生にとって企業の就職を考えている人もいたため、社会人としての心境やキャリア形成、中国経済の情勢とその捉え方などにつ

いても言及していただきました。他のテーブルからも驚きや納得の反応が聞こえ、充実した時間であったことがうかがえます。

この夕食会は今回の旅程で初めての現地での食事でした。飛行機の揺れが少なくなかったため疲れもあったと思いますが、美味しい料理とその後夜景で疲れが飛びました。懇談以外にも小籠包の食べ方や日本とは若干異なる箸、そして中華料理の風味などを感じられ、刺激的な時間でした。

感想

第１に、ツアーを通して中国の豊かな文化や風土を存分に味わうことができました。また、企業や名所旧跡、大学を訪れる中で感じたのは、そこでは人柄が温かくも確固たる矜持を持ち合わせた、ユーモアな人々がいるということです。たくさんの方々にお世話になり、感謝してもしきれません。第２に、参加学生同士の親睦が深まったとともに、自分自身の視野を多分に広げることができました。前述のとおり、今回のツアーは学校や学部学年が異なる学生の参加によるものです。いわば、お互い初めましての人が多かったなかで、それぞれの専攻や意見、感想、興味関心などを共有でき、貴重な時間でした。第３に、私はある程度中国語（の普通話）を話せる状態で渡航しましたが、実際話してみると上の世代の方々の発音には訛りがあるせいか、聞き取るのが難しく感じました。机上の勉強だけでなく実践を積み重ねてゆくため、近いうちにまた中国に行ってみたいとともに、延いては日中に貢献したいという決意を新たにしました。

呉 ウンビ

報告（在上海日本国総領事館）

3 月 5 日（火）11 時から約 1 時間、在上海日本国総領事館を訪問し、領事館の業務内容や日中関係、上海での生活について話を伺った。広報文化部長の長谷川氏からは、領事館の役割や、在住を通じて変化した中国の印象について説明を受けた。

領事館の業務の中で特に重要なのが邦人保護と VISA 発給である。1 日 1 万件以上の申請を処理し、入国審査の最終判断は法務省の入国管理官が行うため、領事であってもその決定に関与できないとのことだった。VISA の発給は単なる事務手続きではなく、日本の安全保障

や国際関係にも関わる重要な業務であり、その重責を改めて認識した。また、在中日本人や日系企業の安全確保のため、警備を強化し事件の再発防止に努めているとのことで、日本人が安心して生活できる環境を支えていることを実感した。加えて、日中関係を促進するためのSNSやHPでの発信や、定期的にセミナーを開催しているとのことだった。慎重な言葉選びを意識し、正しい情報を伝えることの重要性を認識した。

日中経済関係については、両国の文化的共通点が多いため、協力の可能性が大きいと指摘された。例えば、自動車分野ではカーボンニュートラルに向けた水素技術の発展が期待されている。ただ、中国の先進技術に関しては、日本が学べる点も多いと感じた。

最後に、上海の生活環境についても興味深い話を伺った。長谷川氏は「開放的で暮らしやすい」と述べ、教育環境の充実度だけでなく、市が外国人にとって住みやすい環境づくりに力を入れていることに驚いた。また、中国の若者の日本への関心は高く、経済的に豊かな都市ほど日本文化に触れる機会が多いことは、日本と類似していると思う。

今回の訪問を通じて、固定観念にとらわれず、相互理解を深めることの大切さを改めて認識する貴重な機会となった。

感想

今回の研修を通じて、実際に現地で得た一次情報の価値を強く実感した。机上の知識だけでは得られない、生の経験に基づく洞察を得ることで、中国に対する固定概念を見直し、よりオープンな視点で物事を捉えるきっかけとなった。特に、中国は今後ますます世界経済の中心としての存在感を強める国であり、その市場の動向を的確に捉えることで、今後の日本経済の動きを予測し、他者より一歩先を読む視点を養えることを実感した。また、華東師範大学での学生交流では、中国の学生が持つ価値観や、文化・海外に対する考え方を直接聞くことができた。異なる文化の「当たり前」に触れたことで、新たな視点を得ることができ、自分自身の価値観を広げる機会となった。

今回の研修を通じて得た知見を活かし、固定観念にとらわれることなく、広い視野を持って世界を見つめ続けたい。

大月　香乃

報告（常陽銀行上海駐在員事務所）

2 日目に常陽銀行上海駐在員事務所を訪問した。常陽銀行上海駐在員事務所は、上海国際貿易中心の 19 階に位置する。開設は 1996 年であり、常陽銀行の海外拠点としては一番歴史が古いといえる。主な業務は、取引を行う企業の海外展開を支援することであるという。具体的な業務としては、中国の市場への進出を支援する、現地での取引先の拡大を図る、資金調達の相談業務を行うことや、投資環境、インフラ、現地ニーズ、税制、物流ルート、雇用状況等の現地情報の提供、専門機関の紹介、セミナーや商談会の開催などを行っている。今回の訪問では、初めに上海駐在員事務所を紹介する動画を視聴し、その後質疑応答が行われた。参加者からの質問は、上海駐在員事務所の業務に関するものから、中国におけるビジネスや中国に滞在している人から見た中国や日本についてなど多岐にわたり、活発な質疑応答が成された。「仕事のやりがいは何ですか？」という質問について、仕事のやりがいは、クライアントから悩みを相談され、ソリューションを提供する際に感じるという。日本と中国の双方で暮らした経験のある駐在員の方は、日本人と中国人の両方の視点から仕事に取り組んでいるという話もされていた。また、ビジネスの現場における日本人と中国人の考え方の違いについてもお話されていた。日本は減点主義であり、リスクを恐れる傾向にあるのに対し、中国は加点主義であり、間違えることを恐れずトライアンドエラーでとりあえずやってみようという傾向が強いという。中国企業の意思決定の速さや勢いを増していることは、この点に起因するとも考えられる。さらに、駐在員の方は、日本のメディアにおける中国に関する報道が真実ばかりではなく正確に伝わってはいないとおっしゃっていた。事実を真実として報道しづらい社会的な風潮が存在するというお話もされていた。新型コロナウイルスの感染拡大により、中国を訪れる人が減少したことも原因の一つであるという。このスタディツアーもコロナ禍を経て 5 年ぶりの再開となったが、実際に自分の目で見るという経験は重要であるため、このような機会はなくしてはならないと感じた。

感想

今回のスタディツアーでは、個人的な旅行では訪れることのできないような日本国総領事館や JETRO 等の機関を訪問することができ、とても良い機会と

なった。実際に中国を訪れたことで、これまで中国という国に対して抱いていた印象は大きく変わった。正直なところ、これまではあまり良い印象を抱いていたとは言えなかった。しかし、実際に訪問し、様々なものを見て、食べて、現地の学生などと交流し、言葉を交わす中で、自分の中で作り上げられていたイメージというのは、切り取られたごく一部の情報だけを見聞きして形成されたものにすぎないのだと気づいた。私たちは、既存の価値観や社会的な風潮に惑わされることなく、物事の本質を捉えていくべきであろう。現代においては、日本にいながらも世界中の多くの情報を得ることはできるが、やはり実際に現地に出向き、真実を自分の目で見ることが大切であると強く感じた。

大友　麻有里

報告（外灘地区）

上海に到着した 3 月 4 日の夜に、外灘地区を訪れ夜景を見学した。バスを降りてから外白渡橋を渡り、黄浦公園の中の夜景が見えやすい所まで移動した。歩いている途中で、赤くライトアップされた外白渡橋と上海人民英雄記念塔を見た。外白渡橋は 100 年以上の歴史がある橋で、上海のシンボルとして親しまれている。上海人民英雄記念塔は戦争で亡くなった方の供養のために建てられたもので、天に突き刺すように建っていた。

外灘地区の夜景は100万ドルの夜景と呼ばれるほど美しく、世界的に有名である。黄浦江という川を挟んで浦東と浦西というエリアに分けられ、それぞれ違った景観を楽しむことができた。私たちがいた岸側の浦西は、歴史的な建築物が多く立ち並ぶ昔の上海、浦西から見える浦東は、大型ビジョンとタワー群が印象的な新しい上海と呼ばれていた。浦西は西洋建築が多く、時計塔のような建物があったり二階建てのバスが走っていたりして、イギリスの植民地時代の影響を感じた。浦東はテレビ塔や上海タワー、栓抜きのような形をしたビルなど近代的な建築物が多く、ビジョンに映る文字や建物のライトアップがきらびやかであった。外灘は、租界時代に行政と経済の中心であったため今も官庁や銀行が多いが、高級ブランドの大型旗艦店やおしゃれなレストランやカフェなどの街並みもあった。

夜景を見た黄浦公園は、有名な作り話として「犬と中国人は立ち入るべからず」という注意書きがあったとされている。また、7 日の日中に外灘を訪れた時は混雑していたが、平日の夜だからか人が少なく、ゆっくり写真を撮って過ごすことができた。

感想

中国で生活する日本の企業や自治体などで働く方々から話を伺い、中国や中国人に対するイメージが変わった。なぜなら、日本の中国の報道は事実と乖離していたり、良くない印象を与えたりしていることがあると聞いたからだ。中国は日本と比べて新しいことを積極的に取り入れる姿勢が強く、保守的な日本が見習うべきところだと学んだ。国が異なれば文化の違いで合わないと感じることもあるが、お互いの違いを良さも悪さも両方含めて受け入れ合うべきだと思う。上海スタディツアーを通して、日本で得られる情報だけでは世界のことを知るには不足していると分かり、現地に赴いて情報を得ることが重要だと気づけた。よって、これからもっと他の地域も訪れて現地のことを知り、自分の目で情報を確かめるようにする。

大貫　達也

報告（JETRO 上海）

日本貿易振興機構（JETRO）は農林水産物・食品の輸出や日系の中小企業の海外展開のサポートなどに取り組む経済産業省所管の独立行政法人である。ジェトロ・上海事務所は１９８５年に設立し、現在、４２人の職員によって運営されている。

私たちは３月５日にジェトロ・上海事務所に訪問し、ジェトロ上海企業進出支援センターの日本人の職員の方から、主に、昨年度指摘事項から考えられる中国の社会問題と中国ビジネスの今後の新規取り組みについてご講話をいただいた。前者の講演では、少子（高齢）化問題、定年年齢延長の必要性、若年層の高失業率、訪中ビザ免除の復活、日本産海産物の輸出禁止といった社会問題を紹介していただいた。特に、中国における少子（高齢）化問題は深刻であり、２０２３年の中国の年間の出生者数は一人っ子政策最後の５年間の年平均出生者数に比べて、７００万人ほど減少しており、また、２０２３年の中国の結婚者数は２０１３年に比べて、４３％減少しており、晩婚化や非婚者の増加が加速していることがわかった。後者の講演では、中国市場の現状と新規事業の取り組みについて学んだ。中国市場は日本やアメリカ合衆国のような「誠実なビジネス」とは異なり、勢いに

乗った規模の大きな会社が競争をし、人々が苦しむほどの変化の激しい寡頭競争型の市場であることを理解した。また、中国で新規事業を取り組む際は、競争を回避できる優位性、現地販売パートナーの必要性、次々とアイデアを出すことのできる柔軟性の３つが重要であることを学んだ。

感想

私は今回の上海スタディツアーを通して、上海が想像以上に経済的に豊かで、人々が温かいことを実感した。上海に渡航する以前の私の先入観では、上海は日本よりも技術的に劣っており、冷酷な人が多いという印象を恥ずかしながら抱いていた。しかし、実際に上海へ渡航すると、キャッシュレスの普及や自動運転技術の発展など、中国がアメリカ合衆国に並ぶ経済大国である所以を肌で感じることができた。また、華東師範大学の学生をはじめ、中国の企業の経営者、飲食店でたまたま隣の席になった現地の人と多くの中国人との交流を通して、言語が違うだけで温かい人はどこにでもいることに気づいた。先入観を持たず、自分の目で物事を判断することの重要性を学んだ４泊５日となった。

加瀬　史歩

報告（紹興市視察（倉橋直街、八字橋））

上海スタディツアー３日目、この日は朝から３時間かけて紹興市に移動し市内の様々な場所をめぐりました。

倉橋直街は文字通りのまっすぐな一本道の路地で、たくさんの小さなお店が立ち並ぶ商店街のような場所でした。この場所の景観には大きな特徴があります。それは、道の両側にずらりと立ち並ぶ建物から感じられる歴史的な佇まいです。白く塗りこめられたレンガ造りの壁、薄い瓦を何層にも重ねた黒い屋根。これらの様式は、ありふれた色合いの町並みを、特別感のある異国情緒が感じられるものへ仕立て上げています。落ち着いた色合いの外部とは異なり、この通りにある店たちの中では色とりどりの様々な商品が売られています。観光客向けのカラフルな置物から、一匹丸々の茶色いアヒルのスモークまで本当にたくさんのものが売られていました。なかでもとりわけ目を引くのが、紹興市にゆかりのある中国の

大作家、魯迅のグッズです。歴史の教科書でお目にかかる威厳に満ちた肖像からは想像もできないようなかわいい姿となった魯迅のグッズがたくさんのお店で売られていました。

八字橋は世界遺産『大運河』の登録資産の一部となっているようで、橋のすぐ近くにはその歴史について解説したレリーフが建てられていました。大運河は隋の皇帝煬帝の時代に建設が開始された運河で、黄河と長江を横断しながら北京と杭州を結ぶ非常に大規模なものです。この運河の開通により物流は急成長を遂げ、中国全土における商業の発展を支えたと言われています。この橋は、ヨーロッパ建築で盛んなアーチ構造を用いた様式ではなく、薄い石を積み重ねることによってなだらかな傾斜を作りだしています。この橋のほんの数十センチ周りには民家が立ち並び、この地域の人々が日常生活を送っている。その事実はなんだか奇怪なようにも感じられるが、実際の景色を目にすると違和感は全く存在せず、むしろ調和すら感じられる。この橋は川の両岸のみならず、はるか遠い昔と現代をもつないでいるのかもしれない。

感想

知り合いが全くいない状態での参加で最初は不安もあったものの、ほかの参加者とすぐに打ち解けることができて本当に良かったです。それぞれが自分の目標を持っている人たちだったので、ただ仲良く過ごすだけでなく「自分ももっと頑張ろう」と思えるような刺激をたくさんもらうことができました。

実際に現地に行ってみたことでこれまでの自分が知らなかった新たな世界に触れることができて本当に良かったです。

菊地　清華

報告（アポロパーク上海）

上海スタディツアー2 日目となる 3 月 5 日（水）午後、中国最大の検索エンジンを運営する Baidu(百度)が手掛ける自動運転の開発・実験施設である「Apollo Park 上海」を訪問した。現地社員の方 2 名に笑顔で迎えていただき、ワクワクした気持ちでお話を聞くことができた。はじめは施設内を案内しながら、Baidu が自動運転技術を実用化させるためにどのような研究を行ってきたか、約 10 年の歴史を説明していただいた。自動運転開発で最も重要となるのはその安全性であるが、開発している自動車には、本体に 15 台ほどのカメラを搭載することにより、死角も捉えることができるという。また、現在 Baidu が提供している百度地図を利用することによって、運転中にも移り変わる道路状況を把握することが可能で、精度に限らず鮮度の高い情報を提供する。

その後は、実際に自動運転をする自動車に 3 人 1 組で乗車した。Apollo Park の周辺は自動運転シティとなっており、実際の道路で実験が可能である。搭載カメラと道路把握によって、右左折時に障害物から距離を取ったり、車線を変更したりする動きを見ることができた。約 5～10 分ほどの自動運転を体験した参加者たちは、初めての自動運転にみなドキドキしたようだった。

施設内には、小学生たちが書いたポスターも展示されていた。子どもたちの想像する、羽が生えた未来の車が書かれており、希望に満ちた技術発展を表している。ある一枚には、絵とともに、「科技、让世界更简单（テクノロジーは、世界をより簡単にする）」と書かれていた。彼らが車を持つ頃には、テクノロジーが日常に浸透した社会になっているかもしれない。

感想

今回のツアーで私は初めて中国を訪問したが、一日一日が新たな学びばかりで、非常に楽しんで参加することができた。上海が世界的にみても経済面で活発な都市だということは、街並みや人々の様子一つをとっても感じられた。そういったことは、日本にいて写真や動画を見たとしても感じることに限りがある空気感であり、忘れられないものとなった。また、中国で働く日本人の

方々からお話を伺うことができたのも、自分の将来の選択肢を広げることに繋がったと感じる。一方で、もっと中国語を聞き取り、話すことができたらさらに良い経験になったとも実感した。これから機会があれば、その土地の言葉で、少しでもその土地に入って物事を見ることができるよう、学びたいと思う。

澤木　明

報告（浙江極客橋智能装備股份有限公司（ＧＢＩ））

上海スタディツアー３日目（３月６日）の午後、私たちはドローン開発を手がける浙江極客橋智能装備股份有限公司（GBI：Geek Bridge International）を訪問した。

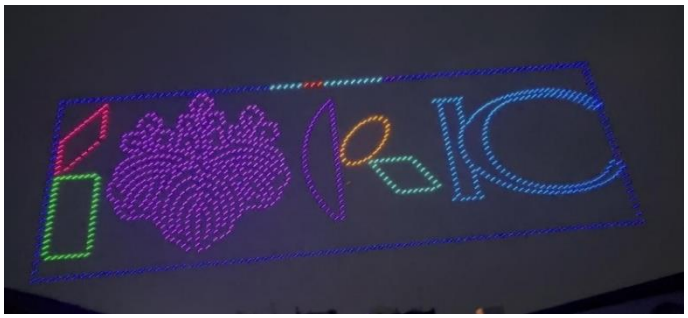
昼食後バスで移動し、１６時頃に GBI へ到着。最初に、屋外で実際にドローンを動かしている様子を見学した。照明用ドローンについて説明を受け、操作を体験させていただいた。照明用ドローンは、地上のバッテリーと接続しながら飛行させるため、長時間の使用が可能だという。災害時の活用に加え、スキー場やゴルフ場、キャンプ場などでも利用されている。照明としての機能に加え、スピーカーやカメラも搭載されており、多様な用途があることが分かった。

見学の後、会社の方々がお菓子やフルーツを用意してくださっており、ティータイムとなった。歓談の途中、GBI の社長から会社の歴史や製品、今後の展望についてお話を伺った。また、急遽、同日に GBI を訪問していた婦人会の方々と書道を行った。

その後、サプライズでドローンショーを披露していただいた。色とりどりに光るドローンが巧みに操られ、約１０分間のショーを楽しんだ。日本語でのメッセージや、参加学生の所属する大学の校章が空に描かれる演出もあり、歓迎の気持ちが伝わって非常に嬉しく感じた。

ドローンショーの後は、GBI の方々、婦人会の方々とともに、会社の最上階で夕食をいただいた。夕食では、紹興酒や臭豆腐など、上海料理とはまた異なる中華料理を楽しんだ。また、私の席の近くには GBI でインターンシップをしている大学生が座っており、食事を楽しみながら交流することもできた。

夕食後、名残惜しい気持ちを抱きつつバスに乗り、浙江省を後にした。約２時間弱の移動を経て、２２時過ぎにホテルに到着した。



感想

今回のスタディツアーで、私は初めて中国を訪れました。これまでは、メディアを通じた情報でしか中国や上海を知りませんでしたが、実際に自分の目で現地の様子を見て、現地で働く方々から直接お話を伺うことで、中国や上海に対するイメージが大きく変わりました。

特に印象に残っているのは、お話を伺った多くの方が、自分の目で見て現場を感じることが大切だとおっしゃっていたことです。今回の経験を通じて、今後もさまざまな場所を訪れ、自分の目で確かめ、判断することを大切にしていきたいと感じました。また、華東師範大学の学生や茨城県の大学生との交流を深めることができ、とても良い刺激を受けました。

このような貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

清水　星夜

報告（アポロパーク上海）

２０２５年３月５日、私はアポロパーク上海を訪れ、自動運転技術に関する説明を受け、実際に自動運転車に乗る体験をしました。アポロパークは、百度が運営する自動運転技術の研究開発拠点であり、実証試験が行われている施設です。

アポロパークで、自動運転技術の開発において重要な役割を果たしているのが、キャリブレーションルームです。この部屋では、車両のセンサーやシステムが実際の走行環境において正常に作動するかテストされています。キャリブレーションルームでのテストは、実際の走行テストに比べて短時間で性能を評価できるため、効率的な開発のために非常に重要です。

さらに、私はアポロパークで自動運転車に実際に乗る体験をしました。この車両は完全な無人運転が可能で、車両内のＡＩシステムが周囲の環境を認識し、道路や障害物、信号を正確に判断して走行していました。また、交差点を通過する際にも他の車両や歩行者と適切な距離を保ちながら、安全に走行していました。この体験を通じて、自動運転技術が日常生活にどれほど近づいているのかを実感しました。

また、武漢で行われている自動運転タクシーの実証実験についても話を聞きました。武漢では完全自動運転のタクシーが都市部で運行され、乗客を目的地まで送迎する試みが行われています。自動運転タクシーは、交通量が多く複雑な都市環境においても安定した走行を実現しつつあり、商業化に向けた重要なステップとなっています。武漢での実証実験を踏まえて、今後多くの都市で自動運転タクシーが導入され、広く利用される可能性があります。自動運転技術が今後の交通システムに与える影響は計り知れず、私たちの移動手段を大きく変える可能性を感じることができました。

感想

今回の上海スタディツアーに参加して、最先端の技術やビジネスの現場を直接見ることができ、非常に有意義な時間を過ごしました。特に、上海の急速な発展と、その背景にあるイノベーションの力を実感することができました。多様な産業や企業がどのようにして成長し、グローバルな競争力を高めているのかを学び、今後のキャリアに活かせる貴重な知識を得ることができました。

今後は、この経験を基に、より広い視野を持ち続け、異なる文化やビジネスの仕組みを理解する力を高めていきたいと考えています。また、得た知識を活かし、実践的なスキルを磨いていくことで、未来の課題に対応できる柔軟な思考を身につけていきたいと思います。

瑞慶覧　長秀

報告（華東師範大学（交流会と昼食））

３月７日（水）現地時間午前１０時より、上海市にある華東師範大学、通称 ECNU（East China Normal University）に訪問した。

まず初めに華東師範大学についての映像資料を視聴して説明を受け、質疑応答をする時間があった。華東師範大学には３タイプの留学プログラムがあり、130 ほどの国々からの留

学生が学びに来ている。また在校生は大学寮に下宿することができ、今回訪問したキャンパスには主に留学生が通学しており、そこから地下鉄で１時間ほど移動したところに主に中国人学生が通うメインキャンパスがある。

次に華東師範大学で日本語を学んでいる大学生の方々とグループごとに交流を行った。私のグループと交流してくださったのは劉柏彤さんと蘇妍佑さんという方々だった。交流会のなかで、蘇妍佑さんに大学での日本語学習について伺うことができた。彼女によると、大学では日本語の基本的な文法から教わり、会話練習などでは実際に日本人の先生からレクチャーを受けることができるとのことだった。また日本語には平仮名、片仮名、漢字など様々な文字があることや、敬語や外来語の習得が必要なため、勉強する上でこれらの点が大変だったと教えてくれた。

交流会の後、大学内の学食にて昼食をとった。上海では Alipay などのアプリやカードを使ったキャッシュレス決済が主流であり、学食でも学生カードを使って決済を行っていた。学食ではグループのみんなで米粉を使った麺料理をいただいた。値段も普段日本の大学の学食で使う値段の半分ほどで、安い価格で昼食を済ませることができた。レンゲを使うと思いきや、金属製のスプーンで代用していたことが少し驚きだった。味付けも濃すぎず、トッピングも自由にできるので大変食べやすかった。

感想

今回私が上海スタディーツアーに参加した動機としては、「なんとなく」としか言いようがない。ツアーに参加する前から、漠然と「将来は海外で１～２年くらい働いてみたいな」という思いはあったが、いざその理由を問われると明確な答えを持ち合わせていなかった。しかしそれもある意味当然のことだった。なぜならそもそも海外になんて行った経験がないのだから、私が思い描くその将来像は、想像の域を出なかったからだ。明確な目的がなく、不安を抱えたまま始まった上海での研修は、結論から述べると大いに収穫があった。自分の知らない街に行き、新しい言葉・文化に触れ、これまでの友人たちとは異なる背景を持つ人たちと関わることのできた経験は、私の海外に対する漠然とした恐怖を取り除き、海外で暮らす・働く

ことのイメージを与えてくれた。一週間に満たない研修で能力が飛躍的に拡大することはないが、今回の経験は今後の私の学びに良い影響を与えてくれると信じている。

田中　若葉

報告（浙江極客橋智能装備股份有限公司）

３月６日（木）の午後、浙江極客橋智能装備股份有限公司（ＧＢＩ）を訪問した。はじめにＧＢＩが開発した照明用小型ドローンの説明を受け、操縦体験をした。その後、レセプションを受け、胡克飞社長のお話をお聞きし、最後にドローンショーを観賞した。

まず、照明用小型ドローンについて、その特筆すべき点は、①ＬＥＤの搭載、②災害時に活きる機能、③優れた操作性、の３点である。このドローンでは、ＬＥＤの冷却に飛行のためのプロペラを用いることで、軽量化を実現させた。この点に関して、社長が直接丁寧に説明してくださった。また、最高１８ｍの飛行高度やマイク・スピーカー機能といった特徴に加え、動力を電源から直接得ることも可能である。そのため、災害時の照明やアナウンス手段としての使用も想定されている。操作性に関しては、直感的な操作が可能でとても簡単であった。筆者自身も操作を体験したが、ゲーム機のように片手で簡単に操作することができた。従来のラジコンのような難しいドローン操縦のイメージを覆す、誰でも操作できるドローンであった。

そして、たくさんのドローンが夜空を彩ったドローンショーは圧巻であった。サプライズ演出だったこともあり、参加者の盛り上がりもとても大きかったように感じている。スタディツアーの参加者が所属している大学の校章や歓迎のメッセージなどがドローンで描かれ、ＧＢＩの技術力やおもてなしに心を打たれる素敵な演出であった。

ＧＢＩは今後、茨城県つくば市へ進出したいと言っていた。ＧＢＩが日本と中国のビジネスにおける交流の新たな架け橋となることを期待したい。

感想

私は、このスタディツアーを通じて学んだこととして、中国の急速な経済成長の要因について考察したい。それは、①人的資本、②社会経済的要因、の２つであると考える。郊外にも高層マンションが多く建っている上海の景色を見て、中国の急速な経済成長の原動力はここにあるのだ

と強く感じた。また、社会経済的要因としては、リーダーシップに基づいて一極集中的に資源を投じる社会の風潮が根底にあることを学んだ。
この５日間で中国の様々な側面ついて学ぶことができたが、今回見たものが「中国の全て」であると捉えるべきではないだろう。広大な領土を持ち多様な民族が共存する中国をより深く知るために、今回は訪れていない地域についても積極的に探究していきたいと思う。

為我井　侑未

報告（現地大学生との市内視察と夕食会）

４日目の３月７日（金）午後、グループに分かれ、華東師範大学の学生である黄子衿さん（３年)、李慧さん（３年）とともに上海の街を探索した。

南京東路では、中国で人気のある瑞幸珈琲（ラッキンコーヒー）や、２人のおすすめであるｃｈａｇｅｅに立ち寄り、中国茶インスパイアのドリンクを楽しんだ。私が瑞幸珈琲で注文したのは、ジャスミン茶と珈琲をブレンドし、オーツミルクを加えた珍しいミルクティーだった。ｃｈａｇｅｅでは、金木犀の香りが漂う珍しいミルクティーを選んだ。どちらのドリンクも美味しさはもちろんのこと、いずれも１０～２０元、日本円で４００円以下という価格に驚かされた。手軽で美味しく、各店舗が特色を出した展開に、中国企業の実力を感じた。さらに、福州路では生煎という小籠包に似た点心を味わった。さすがと言うべきか、李さんは生煎の皮に包まれたスープを飲むのがとても上手で、彼女に教わりながら私も美味しくいただいた。私の提案で、余った２つの生煎をめぐり、ジャンケン大会が始まった。７人で行う中国語でのジャンケンはあいこが続き、なかなか勝敗が決まらなかった。その様子につられて自然と笑いが起こり、最後までグループの笑顔が絶えなかったことが、良い思い出だ。

また、路地裏でのショッピングにも挑戦した。南京東路は日本で言う銀座のような雰囲気だったが、一歩路地に入るとディープな屋台街が広がっていた。お茶が好きな私は量り売りに挑戦し、簡単な単語を駆使して黄さんの助けを借りながら、なんとか購入することができた。少し手間取ったが、二人であれこれ相談しながら買い物をしたこと自体が楽しかった。

街を歩いて散策する中で、互いの日常生活や日中それぞれのおすすめ観光スポットについて話したり、お土産を買ったりと、個人旅行では得られない貴重な思い出を作ることができた。

散策の後は、豪華な中国料理のレストランで彼女たちと机を囲み、これからも連絡を取り合い、お互いの国を訪れるときには案内し合おうと約束した。この機会のおかげで、国籍や人種の壁を越えた友情と深い体験ができた。この感想を読んで少しでも興味を持った人には、日常の些細なことからでも、ぜひ国際交流の一歩を踏み出してほしい。

感想

一番印象に残ったのは、中国語しか通じず、発音の聞き取りや語彙不足に苦労したことだ。その分、学習意欲が高まり、交流を通して仲良くなった学生の勧めでドラマを見てリスニングを鍛えたい。写真を見返すと、ポイ捨てがなく清潔な街に気づかされた。掃除員の姿は紹興市でも見かけた。日本ではゴミ箱を減らして清潔を保っているが、最近は少し乱れているように感じ、中国の善意に頼らない街づくりに関心を持った。今回の研修を通じて、日中関係の重要性を実感し、互いに学び合う関係を築ける人材になりたいと強く志すようになった。

照沼　朋香

報告（常陽銀行上海駐在員事務所）

研修 2 日目にあたる 3 月 5 日に常陽銀行上海駐在事務所を訪問した。ここでは、常陽銀行上海事務所についてのご紹介や取引内容、現地から見た中国経済の現状などについてお話していただいた。

常陽銀行上海駐在事務所は、中国最大の経済都市である上海の国際貿易中心に拠点を構え、主に茨城県の企業を中心に中国進出を支援している。具体的な業務内容は大きく三つあり、第一に、進出支援として現地の専門機関の紹介やサポートを行うこと、第二に、現地情報の提供やオンライン面談、通訳などのサービスを提供すること、第三に、海外現地法人の資金調達の相談業務を行うことである。中国進出企業にとって、スタンドバイ LC などさまざまな資金調達手段があることを学んだ。

今回の訪問で特に印象に残ったのは、中村所長から聞いた中国の経済成長の実態と、日本とのビジネス文化の違いである。日本のメディアでは、中国に対して否定的な報道が多いが、実際には中国の発展は著しく、街の景観や技術の進歩には目を見張るものがあった。また、

日本の「減点主義」と中国の「加点主義」の違いについてもお話を聞き、日本企業はリスクを避けて慎重に経営を進めるのに対し、中国企業は新しい挑戦を積極的に受け入れる姿勢があると知った。

私はこれまで「メイドインジャパン」の価値が依然として高いと考えていたが、中国ではその価値が相対的に低下しているという指摘を受け、衝撃を受けた。この訪問を通じて、日本企業が国際市場で競争力を維持するためには、従来の価値観にとらわれず、柔軟な発想で変化に対応することが重要であると実感した。今後もこのような視点を持ちながら、経済やビジネスの動向について学んでいきたい。

感想

今回の上海スタディツアーに参加したきっかけは、個人旅行ではなかなか得られない貴重な経験を積める機会だと考えたからである。これまで私は中国に対して一方的なイメージを持っていたが、現地での体験を通して、それが偏った認識に過ぎなかったことに気付かされた。特に、企業訪問では、現地で活躍する日本企業の姿や、中国のビジネス環境の変化を間近で見ることができ、報道だけでは知り得なかったリアルな中国を学ぶ機会となった。

4 泊 5 日の間、普段は接することのない駐在員の方と直接対話し、それぞれの視点や考え方を共有することで、多角的に物事を見る力が養われた。実際に自分の目で現地の発展を目の当たりにし、日本との違いを感じることで、より広い視野を持つことの重要性を改めて認識した。今後もこの経験を活かし、先入観にとらわれずに世界を見つめ、自らの足でさまざまな国を訪れ、学びを深めていきたい。

中川　侍音

報告（日本国総領事館）

３月５日午前、在上海日本国総領事館を訪問した。総領事館は有刺鉄線の付いた高い塀で囲われており、その入り口には複数の警備が配置されていた。敷地内に入るにはパスポート

の提示と荷物検査が必要で、危険物が敷地内に持ち込まれないような取り組みが行われていた。

重厚で厳格な建物の外見とは一変して建物内は日本の雑誌や漫画、伝統的な人形などコミュニティセンターのような作りの休憩ラウンジがあった。

総領事館では、日中交流等について現地駐在の職員の方々から講義を拝聴した。中国人からの日本への印象や総領事館での職務について講義していただいた。講義の最後には質疑応答の時間を設けていただき、学生と職員の方々との間で意見交換を行った。

学生からの質問では、『最も大変な業務はなにか』、『訪人安全観念についての課題点』、『総領事館での業務に携わろうとしたきっかけ』、『中国と協力できる点』、『中国人の若者の日本への関心』などの質問が出た。

質問に対する回答は、職員の方々の主観を交えてしていただいた。特に直近の日本人学校の刺殺事件を受けて安全面の課題点に関しての質問については、警備を増やすなど緊張感をもって取り組んでいると回答いただいた。

私が個人的に興味深かったのは、両国間での印象の推移である。中国と日本は地理的に近いこともあり、西洋諸国に比べて漢字や宗教など文化的な共通点が多く存在する。両国間の印象は悪化しており、これは総領事館としても解決するべき課題として講義内で述べられていた。総領事館では日本に関する数百人規模のイベントを行っている。これに参加する中国人は多く、日本への関心は良くも悪くも高いのだろうと感じた。

感想

今回のスタディツアーで最も私の糧になったのはメディアを通さない、自分の目で中国という国の一端を視察できたことだと思う。もともと中国に対する偏見が強かったこともあり、私の想像していた中国と現実の中国には大きく乖離があることを実感できた。中国では外から見たよりもずっと自由で激しい経済競争があり、その中で生きる人々の活力を感じた。そして、中国で見て、感じた出来事をツアー参加者の方々と共有し、日本との違いを話し合う時間は、日常生活中ではなかなか得られない面白い時間だった。

次は中国以外に行ったり、中国の別の土地に行ったりしたいと思う。国外への視野が広がるとても良い旅だった。

蜂須賀　華

報告（華東師範大学（交流会と昼食））

私たちは、スタディツアー４日目の 3 月 7 日の午前からお昼にかけて上海市にある華東師範大学を訪問した。そこで、華東師範大学の朱冠蘭先生から華東師範大学の歴史や発展についての説明があった。

朱先生の講義中、「華東師範大学での１日」という動画を視聴した。この動画では、華東師範大学に通う大学生の行動が２４時間で表されており、学生の生活の様子がうかがえた。

動画を視聴する中で私が興味を持ったのは、座学の少なさだ。実験や実習、クラブ活動などが１日のほとんどであり、日本の大学よりも体験学習に重きをおいていることを感じられた。体験学習を行うことで、他者とコミュニケーションを取りながら楽しく学ぶことができ、より充実した大学生活を送れると感じた。

また、留学生が数多くいることもとても興味深く感じた。朱先生の説明の中で、華東師範大学には毎年１３０国あまりの国から留学生が５５００人以上もやってきて、そこでの生活は毎日が国際会議のようであるそうだ。国際交流に興味がある私にとってその環境はとても羨ましく思えた。また、華東師範大学に留学をし、様々なルーツをもつ人達と一緒に生活してみたいとも思った。

朱先生の大学説明の後には華東師範大学の学生と交流会があった。交流会では、私たち日本人学生と華東師範大学で日本語を学んでいる８名の中国人学生が 4 つの班に分かれて交流した。その後の昼食時にたくさん会話をしたが、会話の中で趣味や好きなことの話題があった。会話を通して国籍は違えど考えていることは同じなのだと知り、親近感が湧き嬉しく思った。

交流会と昼食を通して中国人の方と直接会話したりご飯を食べたりと近い距離で関わることができ、とても良い機会となった。

感想

私は、将来について考える何かきっかけになればいいなと思い、上海スタディツアーに応募した。上海へ行く前の中国のイメージは、マイナスなものばかりで今回のツアーも果たして日本に帰ってくることができるか、とても心配に思っていた。しかし、実際に上海へ行き、上海の街並みや企業、中国人と関わる中で、日本にはないいい面・プラスなことも多く見受けられた。

このことから、実際にその場所に行き、現地の人々と関わって肌で感じなければ、物事の本質は見えてこないのだと感じた。

今回のツアーを通して、これからはニュースやネットの情報を鵜呑みにせず、自分の目で真実を見つけに行きたい。また、ツアーで学んだことや感じたことを周りに発信して、日中の友好につながればいいなと思った。

花木　枝里奈

報告（茨城県上海事務所員等との懇談夕食会）

上海スタディツアーの初日、私たちは茨城県上海事務所の方々と大富貴酒楼で夕食を共にした。この食事会では、現地でのビジネスや生活、日本との違いについて貴重な話を伺うことができ、上海という都市や中国での仕事の在り方について学ぶ機会となった。

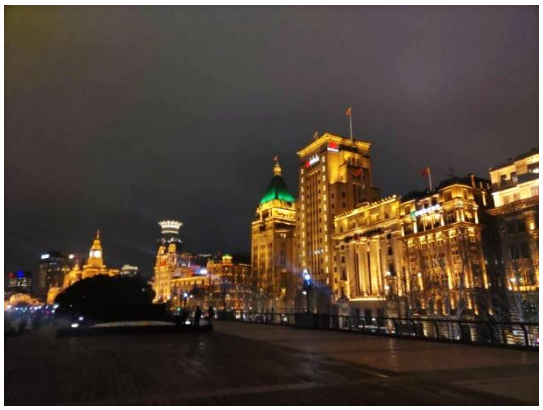
まず、茨城県上海事務所の仕事内容について教えていただいた。事務所では、日本の芸術や食文化を中国で紹介する展示会の運営や、ビジネスの誘致・企業のマッチングなど、多岐にわたる活動を行っているとのことだった。次に、上海での生活についての話も伺った。上海は中国の中でも特に発展が著しい都市であり、日常生活の利便性が非常に高いという点が印象的だった。日本食も簡単に手に入ることなど、日本人にとっても暮らしやすい環境が整っていることを知った。一方で、中国ならではの習慣や価値観の違いもあり、それらを理解しながら仕事や生活することが求められるという話も興味深かった。また、中国での仕事の進め方と日本との違いについても話題になった。中国では、スピード感を持ってビジネスを進めることが重要視され、意思決定が非常に早いという点が印象的だった。日本では、慎重に検討を重ね、時間をかけて合意形成を行う傾向があるが、中国では柔軟に対応しながらも素早く判断し、実行に移すことが求められるという。さらに、中国のビジネスの現状や今後の可能性についても話を伺った。

この夕食会では、中国で活躍する日本の方々の一視点を知ることができたのが非常に大きな収穫だった。上海という都市の魅力や、文化の違い、ビジネスの進め方など、多くの学

びを得ることができた。スタディツアーの初日にこのような貴重な機会を得られたことで、これからの上海での経験がより充実したものになると感じた。

感想

上海スタディツアーでは、都市の景観や文化、人々との交流を通じて多くのことを学びました。上海の都市景観は、近代的な部分と古風な部分が融合し、歴史と開発が同居するユニークな景色が印象的でした。また、現地の大学生との交流を通じて、中国での生活や文化についての新たな視点を得ることができました。特に現地の人々の優しさに触れ、言語の壁を越えてコミュニケーションを取ろうとする姿勢に感動しました。さらに、キャッシュレスやデジタル化の進展には驚かされ、上海が常に新しいテクノロジーを積極的に取り入れていることに感銘を受けました。最初はあまり良い印象を持っていなかった中国でしたが、５日間の滞在を経て、再び訪れ、さらに深く学びたいという気持ちが湧きました。



羽村　亜海

報告（紹興市視察（紹興鑑湖風景区、魯迅故里））

上海スタディツアー3 日目は、浙江省紹興市を訪問した。私たちが宿泊していた上海のホテルから、バスで約 2 時間半の距離に位置する。高層ビルはそれほど多くなく、景観が守られている印象を受けた。

まず、魯迅祖居を訪れた。ここは戦火で一度焼失し、現在の建物は再建されたものである。それでも、魯迅の幼少期の様子が想像できるほど、精巧に再現されていた。祖父が高級官僚であったこともあり、祖居は非常に広く、立派な中庭もあった。

次に、魯迅記念館を訪問した。ここには、魯迅の幼少期から日本留学期、そして共産党結成期までの生涯が、豊富な写真とともに紹介されていた。日本との関わりが深い魯迅だが、記念館内には「魯迅と藤野先生」のタイトルの立体展示が設置されており、驚

かされた。他の経歴ではなく、藤野先生との出会いを像として表現していることから、魯迅にとって藤野先生の存在がいかに重要だったかを改めて認識した。

昼食は、魯迅の小説『孔乙己』に登場する「咸亨酒店」でとった。この店は茨城県常陸太田市にもあるため、ぜひ訪問してみたい。店頭には、小説と同じように長着をまとい、辮髪姿で茴香豆らしきものをつまみながら酒を楽しむ孔乙己の姿が再現されていた。小説の描写が随所に再現されており、それを探すのが面白かった。

円卓を囲み、中国八大料理の一つである浙江料理を楽しんだ。味付けは素朴なものや甘めのものが多かった印象だ。名物の一つである臭豆腐は、発酵させた豆腐を油でカラッと揚げたもので、思ったよりも軽く、食べやすかった。

感想

初めて中国を訪れたことで、中国人の優しさや経済・産業の持つ大きなポテンシャルを実感することができた。実際に自分の目で見て、耳で聞き、肌で感じたからこそ得られた気づきだと感じている。

スタディツアーを通じて、多くの人と出会い、会話を交わし、さまざまな企業を訪問する中で、自分の中の中国に対する印象が大きく変わった。中国の人々は気さくで世話好きな方が多く、また仕事においては「失敗を恐れず、まずはやってみる」というスタンスを持っている。その姿勢に日本との違いを感じるとともに、もっと中国と日本の相互理解を深めたいという思いが芽生えた。

廣瀬　弥玲

報告（外灘地区）

2025 年 3 月 4 日、外灘に到着した。目の前には 19 世紀から 20 世紀初頭のヨーロッパの影響を色濃く受けた西洋風の建築群がライトアップされ、幻想的な雰囲気を醸し出していた。一方で、黄浦江を挟んだ対岸には、東方明珠電視塔や上海タワー、上海環球金融中心などの超高層ビル群が輝き、様々な色のライトが川面に反射し、まるで未来都市のような光景を作り出していた。ガイドさんが「ここは古い上海と新しい上海が同時に見られる場所です」と説明していた通り、立っている場所から前を見ると近代的な超高層ビルが立ち並ぶ上海

の姿が広がる一方で、後ろを振り返れば、かつての建築が並ぶ古い上海の街並みが続いていた。同じ場所で全く異なる年代の景色を体験できることに驚かされた。この対比が外灘の魅力のひとつであり、上海という都市の変遷を象徴しているのだと実感した。

また、私はこの日、外灘の夜景が「100 万ドルの夜景」と呼ばれていることを知った。そして本ツアーの 2 週間前に旅行で見た函館の夜景を思い出した。函館山からの景色も「100 万ドルの夜景」と称され、日本屈指の美しさを誇る。1 ヶ月の間に異なる国で 2 つの「100 万ドルの夜景」を見ることができたことに、深い感慨を覚えた。函館は港町ならではの落ち着いた美しさがあり、一方で外灘は歴史と近未来が交差し、赤や紫、青など日本では見ることのできない色合いのダイナミックな輝きを放っていた。同じ「100 万ドルの夜景」でも、雰囲気や魅力はまったく異なり、それぞれの国や都市が持つ個性を強く感じた。

また夜景を楽しんでいると中国語だけでなく、他の言語も聞こえてきて、世界中の人々を惹きつける国際的な観光地であることを実感した。

こうして、私の上海での最初の観光地は、歴史と近未来が融合した外灘となり、上海という都市の奥深さを感じることができた。

感想

今回のスタディツアーは、私の初めての海外体験であった。常陽銀行の職員の方々との会食や自動運転車の試乗など個人旅行で行うには難しい経験ができ、非常に充実した時間を過ごせた。特にドローンの操縦ができたことは大きな感動だった。

また、滞在中に多様な中国料理を食べたことも貴重な体験だった。特に、初日に食べた上海料理は香り高い油の味がし、本場ならではの味であった。日本で感想を聞かれたら「とにかく料理が絶品！毎日でも食べたい！」と答えたほどだった。

今回特に感動した食べ物は写真で手にしている紹興酒アイスである。初めて口にしたが、甘酒のような奥深い甘みがあり、日本でも販売してほしい美味しさだった。

また、華東師範大学の学生とはバスで隣になり、大学生活や趣味について語り合えた。こうした交流を通じて、文化の違いを超えたつながりの大切さを改めて実感した。

村越　萌佳

報告（紹興市視察（紹興鑑湖風景区、魯迅故里））

３月６日（３日目）、７時にホテルを出発し、バスで３時間かけて紹興市に到着しました。途中サービスエリアに寄りました。

魯迅故里で到着後、集合写真を撮り、最初にガイドさんの解説を聞きながら、魯迅の生家を見学しました。魯迅故里には、魯迅が生まれ育った場所、魯迅の祖先の家、魯迅の旧居など、魯迅が幼少期に実際の生活した場所がありました。

魯迅の祖先の家は、魯迅の故郷の東端に位置し、魯迅の先祖が代々住んでいた住居です。黒い瓦、白い壁、木造石造りの建物が特徴で、紹興で最もよく保存されている清朝の台門建築の一つです。魯迅旧居は清朝の嘉慶年間に建てられ、１８８１年9月２５日にここで生まれました。魯迅は１８歳までここで暮らし、その後南京に留学、故郷に戻って教師になった後もここで暮らしていたそうです。魯迅故里は何度か火事で再建されたため、座ったり触れたりできる場所が多く、より生活に対して解像度が上がりました。

魯迅の旧宅を見学した後は、資料館に向かいました。そこには魯迅の書籍の解説、魯迅の日本留学時の写真やノートが展示されていました。魯迅故里のグッズショップでは、デフォルメ化された魯迅のグッズが沢山ありました。親しみのあるデザインでしたが日本のゆるキャラと少し異なる雰囲気を持っていて、改めて日本と中国の違いを知ることができました。

資料館見学後は咸亨酒店で昼食を取りました。咸亨酒店に至るまでの道のりに４店舗ほど臭豆腐の屋台がありました。昼食でも臭豆腐が出てきましたが、独特の匂いが苦手で、食べることができませんでした。今度機会があったら挑戦してみたいです。

感想

今回の上海スタディツアーの５日間は、私にとって刺激的な５日間でした。現地大学の中国人学生との交流や、在上海日本国総領事館など、個人での旅行では行けないような場所を訪れ、様々なお話を聞いたことで、中国をより身近に感じ、興味を持つことができました。また、私は普段同じ学部の学生としか交流しないため、今回のツアーに参加していた他大学の学生との交流も有意義な時間となりました。正直中国に対して偏った意識を持っていましたが、今回のツアーでその

偏見は薄まり、ツアーに参加することで、新しい食文化や価値観に触れたことで、もっとたくさんの国に行きたい！と思うようになりました。今回のツアーで好物である火鍋を食べることはできませんでしたが、また中国に行って、今度こそは火鍋を食べたいと思います。

山田　侑奈

報告（紹興市視察（倉橋直街、八字橋））

上海スタディーツアー３日目の３月６日、紹興市にある倉橋直街と八字橋を訪れた。これらの場所は、紹興の伝統的な文化と建築を今に伝える貴重な場所である。

倉橋直街は、紹興の伝統的な街並みが残るエリアで、お土産屋や屋台が立ち並んでいた。歴史を感じる石畳の道を歩きながら、紹興酒を使ったアイスを食べた。ほんのりと香る紹興酒の風味とコクのある甘さがあり、紹興酒が得意でない自分でも美味しく楽しめた。

八字橋は南宋時代に建てられ、付近の市街とともに京杭大運河の一部として世界文化遺産に登録されている。三本の川の合流点に架かる橋で、四方から登ることができる珍しい構造をしている。横から見ると「八の字」の形をしており、その名の由来となっている。水路には船がいくつも浮かび、実際に乗船した学生もいたようだ。橋の周囲には古民家が多く残り、住民たちが洗濯物や野菜のようなものを干している様子が見られた。観光地でありながらも、そこには人々の暮らしが息づいていた。長い歴史を持つ街だからこそ、今もなお地元の人々が生活の場として大切にしているのだと実感した。

上海は高層ビルが立ち並ぶ大都会であり、中国の急激な発展を象徴するような街であった。それに対し、紹興はどこか懐かしく、穏やかな空気が流れていた。日本にも古き良き街並みが多く存在するが、観光と生活が共存できる環境づくりこそが、歴史ある街を守るために重要なのではないかと感じた。

感想

観光ではなかなか行けない場所やなかなか話す機会のない人と関われそうという理由で今回参加を決めたが、想像以上に楽しく充実した５日間だった。来年から大学院に進学し中国からの留学生と関わる機会が多くあるため、今回の経験は貴重なものとなった。

しかし、全く中国語を話せない状態で参加したことに少し後悔も感じた。現地の人と直接交流する機会があっただけに、言葉が分かっていればもっと深く関われたのではないかと思う。

また、ツアーメンバーの多くは自分より年下でありながら、中国と日本の経済や歴史についてしっかりとした考えを持っており、その姿勢に刺激を受けた。理系だからといって知識の幅を狭めるのではなく、今後は世界の情勢にも目を向け、より広い視野を持つ努力をしたい。

米山　鈴薫

報告(JETRO 上海)

スケジュール 2 日目に JETRO（日本貿易振興機構）上海事務所（以下 JETRO 上海）に訪問しました。この団体は経済産業省管轄の独立行政法人であり，2003 年 10 月に設立されたそうです。上海の他に江蘇省，浙江省，安徽省など，中国にいくつか拠点が存在し，日本国内外 50 程度の事務所を構えています。JETRO の事業活動としては，輸入博覧会に出展し，日本企業の売り込みの実施や，進出日系企業への情報提供，海外投資事業の相談，プラットフォーム事業での支援サービスなどが挙げられます。

今回の訪問では，日系企業の現状や昨年 2023 年度の報告から浮彫となった中国が抱える問題，中国ビジネスの今後の新規取り組みについて講義して頂きました。日系企業の現状としては，去年度と比較して，2024 年は事業再編に関する相談が増加していました。新規進出の相談より，どう売り上げを伸ばすか，規模縮小して事業を続けるか等の策を講じて事業継続を試みる相談が増えているそうです。

また，中国が抱える課題として，少子高齢化問題，若年層の高失業率が挙げられます。『日削月朘』ということわざで表されるように晩婚化，非婚者の増加が指摘されています。1979 年から 2015 年まで続いた一人っ子政策の影響と考えられます。また，日本に比べ

て定年が僅かに早いという現状があり，段階的に延長する政府の施策が取られています。若年層の高い失業率の背景には，中国の膨大な人口が所以で学歴格差が生じ，それが給与格差に直結している現状があります。年々大卒の割合が増えており，今後はその格差が縮小していくと考えられますが，まだまだ時間がかかると考えられます。

以前中国では不動産バブルが生じており，家計貯蓄の約 7 割が不動産購入に向かっていたとされますが，2020 年 8 月の住宅融資規制を契機に，2021 年頃から価格下落が始まったそうです。また中国では訪日して爆買いするというイメージがありましたが，現在個人消費が低迷しており，節約志向で自分の能力や実力以上の行為は行わないということを意味する『窮鬼』というネットスラングが頻繁に使われているそうです。

中国市場の特徴として，瑞幸珈琲という大手コーヒーチェーンが年間に 3,000 店開業（スターバックスコーヒーは年 300 店）するなど多くの業界で寡占化が起こり，新エネルギー車の生産台数が年々増加し供給が需要を上回るなど，熾烈な競争が巻き起こっています。中国市場に参入する企業は，目まぐるしく変わり急激に成長していく経済に対応していかなければならないのです。

質疑応答では活発な意見が交わされており，JETRO にはどのような人が向いているのか，どの程度の語学力があれば就職可能か等の職員の方に関する質問や，経済産業省管轄であるが故のトップダウン的な風潮があるのかなどの突っ込んだ質問も聞かれました。意外にも，理系出身で専門ではない職員の方がおり，その方曰く語学力よりも志望動機や熱量の方が重要であるとの返答をしていました。また，現在中国では公務員志望の学生が増えているが，その説明を求められた際には，中国市場の不景気によって民間が採用数を減らしているという理由が挙げられていました。

感想

自分自身、理工系を専攻しているため経済に関する話題を理解するのに必死でしたが，具体的な中国のことわざを交えながら説明して頂けたお陰で，噛み砕いた内容で理解し易かったです。また訪問している学生で経済を専攻している方もいて，熱心に質問や会話に参入しており，その知識の深さと熱量に感嘆しました。日本の隣の国である中国の経済や市場について学ぶことで，日本経済への興味関心も湧き，対外的な側面の理解にも繋がるというメリットも感じました。とても貴重な体験をさせて頂き，担当して頂いた JETRO 上海の方々には大変感謝しております。

※ここに書かれている内容は、参加した皆さんそれぞれの受け止め方に基づく個人的な見解です。また、記載内容について正確さを保証するものではありません。
※全部または一部を問わず、無断転載を禁じます。